

## タリバン 西側が流し続ける 4つの虚報(上)

### Opinions

### The West is getting Afghanistan wrong – again

**Here are four misconceptions about the Afghan crisis that Western politicians and pundits continue to spread.**

Ahmad M Siddiqi  
12 Sep 2021  
AlJazeera

<https://www.aljazeera.com/opinions/2021/9/12/misunderstanding-afghanistan-and-the-taliban>

## 西側はまたもアフガニスタンを誤解している

### 西側の政治筋が流し続ける 4つの虚報

#### 前編 (以下本文)

#### はじめに

アフガニスタンからのドタバタ撤退劇に、いまや砂ほこりがつもり始めている。それは、アフガニスタン政府の寿命の誤った見通しから始まった。

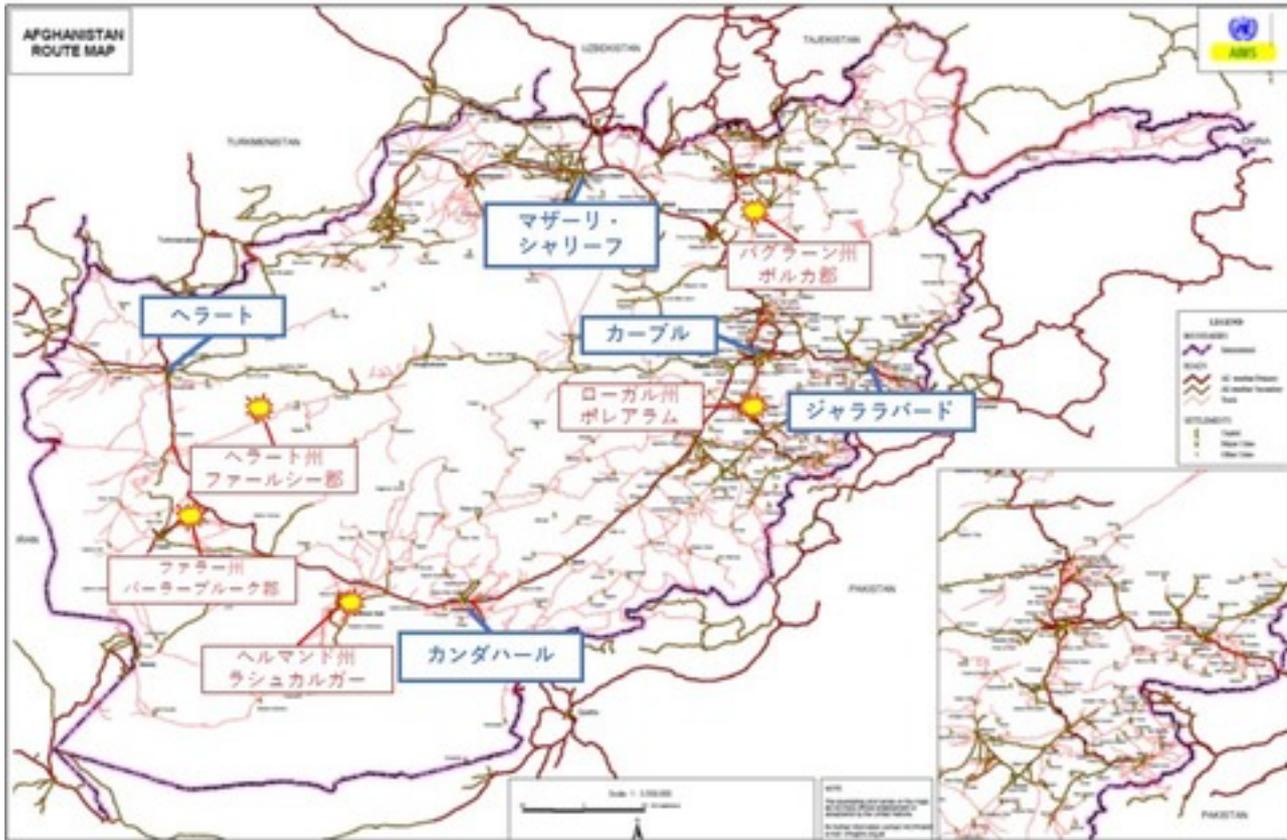
米国はアフガン軍が少なくとも18か月、すなわち来年の4月までは、多国籍軍の守備のもとで維持できると踏んでいた。

ドタバタ劇の終幕は、ドローン攻撃で閉じられた。それは何人かの子供をふくむアフガン人を殺した。その人たちは米国が懸命に避難させようとした当のアフガン人だった。なんとも皮肉な話だが、それは20年にわたる米国のアフガン統治の象徴だった。

米国とNATOが続けてきたこの戦争の虚しさは、長年それを見守ってきた人にとっては驚くべきことではない。これまで20年間、時刻表はしばしば途切れた。そして「状況は最終コーナーを回った」という主張が、あきるほど繰り返されては忘れ去られた。

国際治安支援部隊 (ISAF) を称する経験豊富なアナリスト集団は、アフガニスタンに関する豊富なデータを蓄積しているにもかかわらず、状況の根本を理解できなかった。彼らは「孫子」の表現を借りるなら、「敵を知る」こともできなかったし、「敵の出方」を知ることもできなかった。

本論文は、これまでの西側の過ちをもたらした過去と現在の無知と偏見を総括していく。そしてそのことによって、「新タリバン」の方針を予測し、情勢への影響を評価していくことにする。



アフガン、最近の戦闘(中東かわら版)

## 第一の虚報「アルカイダが戻って来る！」

カブール陥落の2日前、英国のベン・ウォレス国防相は次のように宣言した。

アフガニスタンは内戦に向かっている。

これは、アフガニスタンとタリバン運動の歴史の一部を見て、「おそらくアルカイダが戻ってくる」と判断したからであろう。

彼の見解は間違っていたが、それ以来、クロッカー元米国大使、グラハム共和党上院議員など多くの人物にによって繰り返されてきた。

ベン・ウォレスの声明は、アフガニスタンと中東全域の状況についての時代遅れの理解に基づいている。

2001年以降、アルカイダはアフガニスタンの外に、より肥沃な土壌を見つけた。それらはイラク、イエメン、リビアなど、国家の統治能力が失われ、米国の侵略と爆撃作戦に対する恨みが積み重なった場所である。

組織の成長をもたらしたのは、米国の暴力の空白ではなく、圧倒的な存在だ。

一方、IS のようなより極端な集団がアルカイダに取って代わるように成長した。彼らはいまやその重要性和、米国の領土を攻撃する能力と意欲の両方において、アルカイダをしのいでいる。

それらと対照的なのがタリバンである。タリバンは、多くの機会があったけれども、国境の外で戦おうとはしなかった。アフガニスタン国内では、米軍と暗黙のうちに協力して IS に対抗した。

いまはどの政府も、その国の国民が他国で攻撃を実行しないと保証することなどできない。タリバンだけではない。そのようなことは、いま、タリバンがカブールに平和秩序を確立しようとする意志を真剣に受け止めない理由にはならないのではないか。

IS はカブール空港への無慈悲な攻撃を行なった。それはタリバンの野蛮さを非難するのではなく、タリバンの真摯な意向を真面目に受け止めるべきだということ、そのような態度表明が重要かつ緊急であることますます明らかにしているだろうと思う。

## 第二の虚報 「タリバンは分裂している」

タリバンが分裂しているという主張も、よくある誤解に基づく虚報にすぎない。

この主張は何年にもわたって繰り返し行われてきた。そのような考えを生むもととなったのは、1980 年代の反ソビエトの武装闘争だ。

その時はたしかにムジャヒディンとタリバンの中に相互対立があったのは事実だが、それはタリバン内部の対立を表したものではない。

にもかかわらず、この話、「タリバン内の強硬派と穏健派の対立」の図式は何度も蒸し返されてきた。とくにオバマ大統領の任期中に、それはタリバンとの交渉を避けるための言い訳として頻回に持ち出された。

しかし考えても見てほしい。タリバン指導部(穏健派)がその軍事司令官を管理できなければ、我々はいったい誰と交渉するのか。

米政権内の「タリバン分裂論」は、マッチ・ポンプ戦略をもたらした。一方ではドローン攻撃による指導者狩りで、個々の司令官を引き離し、反乱を分割しようとした。他方では「穏健派」との散発的なとりとめない和平交渉を試みた。

前者はタリバンを分裂させるためにいかなる政治的成果ももたらさなかった。後者も永続的な軍事的利益をもたらすことはなかった。

実際には、タリバンは交渉のリーダーシップを保持し、複数の戦力拠点を備えた、まとまりのある反乱運動として長年にわたって活動してきた。

たしかに、彼らの間で内部の緊張関係があり、時には暴力さえあった。しかし全体として、タリバン運動はこれらの内部紛争を乗り越え、無傷のまま力を維持する能力を示した。タリバンはこの結束力と内部規律を明確に示した。

彼らは昨年、米国との和平協定をしっかりと順守した。公約に従い、アフガニスタン政府との和平交渉を開始した。ISAF 部隊への攻撃はほとんど何もなかった。あまつさえタリバンは、ISIL 攻撃から ISAF 基地を保護するために一連の軍事的保安体制を提供した。

その一方、この夏、戦いの最終盤、タリバンの高度に調整された軍事作戦は見事なものだった。

それは、かつてのムジャヒディンの失敗とは対照的だ。彼らは 1989 年、ソビエト撤退の余勢をかって地方都市ジャラバードを占領するために攻勢をかけた。しかしその攻撃はわずかな計画のために失敗し、そのために、余命幾ばくもなかった共産党政府が、さらに3年も生き延びることになった。

以上のことは、タリバンが完全に単一の活動家集団だと主張するということではない。それはもう一方の極論だ。

運動はなお分散したままであり、個々の司令官の行動規範への準拠は不均一だった。例えば戦闘における諸基準はかなり異なっていた。しかし指導者層は、「モーゼの十戒」水準のレッドラインを明確にし、原則的な政策についてはコンセンサスを形成し、それをしっかり実施する能力を実証している。

### 第三の虚報「タリバンは外国の支援により勝利した」

ISAF とアフガニスタン政府の長年にわたる失敗に伴い、その責任を転嫁すべしスケープゴートを求めて、「神話」の創造が続けられている。

タリバンへの支援を提供したとして非難され続けてきたパキスタン。それは「神話」の中でも最もありふれた主人公である。

諜報活動の研究者であれば、そこに特記すべきものは何も見つけないだろう。

およそどの政府も、どんな時も、先住民の抵抗を正統なものとは認めないものである。米国にとって、ベトコンはソ連と北ベトナムの操り人形であった。フランス人にとって、アルジェリアの民族主義者はエジプトとソ連の操り人形であった。ソビエトにとって、ムジャヒディンは米国とパキスタンの操り人形であった。

そのような流れで見ると、たしかに外国勢力の支援という主張には根拠がある。

パキスタンだけでなく、多くの地域大国が過去 10 年間、タリバンとの関係を維持してきた。具体的にはイラン、中国、ロシア、それにアラブの国々のいくつかである。それらの諸国は ISAF の使命を肯定し、アフガニスタン政府の正統性を認め、さまざまな方法で支援してきた。

しかし武器と資金が黙認されたチャンネルと通じて闇市場に流れ、タリバンの手に渡ったことを否定はできない。ただし、その際も「タリバンの兵器の最大の供給源は、アフガニスタン治安部隊自身だった」という単純な事実を無視してはならないだろう。

そもそもアフガン政府軍そのものが外国援助で成り立っていた国なので、外国援助は勝ち負けの理由にはならない。

したがって、このどっちつかずの言い訳は、NATO がタリバン排除に失敗した理由の説明にはならない。それは逆に新たな質問を生み出すだけだ。

この最後の迅速な崩壊のことだけではない。アフガニスタン政府は、過去 20 年間にわたってタリバンよりはるかに多くの外部援助を受けながら、絶えず負け続け、支配地を失い続けた。

なぜなのか。

**その理由は、外部支援が両刃の剣であるためだ。**

反乱運動を組織するにも政府の軍事力を強化する際にも同様だが、外部からの支援を受けるということは、先住民勢力としての正統性を犠牲にすることを意味する。

この点で、アフガニスタン政府は、予算の 5 分の 4 が対外援助によるものであり、軍隊は身動きがとれないほど肥大していた。官僚主義と公安部隊への怒りは、西側の顧問と将校に対する反感となって染み込んでいった。政府・軍機構を運営していた人々は、タリバンよりはるかに外国に依存していたことが証明された。

タリバンに関しては、今のところ、アフガニスタン民衆の支持率を評価することは不可能だ。カブールいくつかの場所では、人々は治安の改善として、タリバンの統治を歓迎している。他の地方では、深く不信のままである。

しかし、タリバンが広げた伝説は、広範囲の人々の共感を呼んでいる。

それはこんな中身だ。

カブール政府は腐敗しており、外国の勢力に操られている。

カブール政府は非イスラム政策の実行者だ。

その統治は長すぎて、今や腐敗しきっている。

そしてタリバンは過去のイギリスやソ連の統治と現政府を関連付けた。

その伝説は、2001 年の NATO 勝利のあおりで迫害され投獄された人々の怒りを誘った。NATO の空爆で「巻き添え被害」を蒙り友人や親戚を失った人々の恨みを煽った。政府高官の汚職と不公正に怒った人々の正義感に重なり合った。

**過去 20 年間のほとんどの間、タリバンはその伝説のために戦い続けた唯一のグループだ。**

だから当然のことながら、タリバンは避難所を確保し、情報を提供するシンパと、戦場に散った人々に取って代わる新兵の補充ができていた。